

ツキジデスにおける主観を表す語の用法

柳 沼 重 剛

1

Gomme-Andrewes-Dover, *A Historical Commentary on Thucydides* (Oxford 1945-81. 今後はHCTとして引用する)の最終巻(Vol. V)の長大なAppendix 1の中で、A. Andrewesは「(第五巻のかかなりの部分と)第八巻全体は、アルキダモス戦争やシシリー遠征の巻(すなわち第一—四巻と第六、七巻)に比べると、仕上げが不十分で雑駁な感じが強い、と感じる読者が多い」と言っている。⁽¹⁾私もそういう読者の一人で、特に通読して第七巻(今後はVIIと記す)から第八巻(今後はVIII)に入ると、こういう感じがことさらに強いと思っ
ている。もっともこれは、VIIIという巻が、VIに始まったシシリー遠征の「悲劇」が感動的に終わった直後につづいていることにも起因しているはずで、あのVIIの後には、何を持って来ても畢竟'anticlimax'にしかならないだろうと思える。もしこれが歴史でなくて文学作品であるならば、VIIIは問題なく不必要である。「イリアス」がヘクトルの葬礼を以て閉じていることを思えば足りよう。しかもこのVIIの文章というのが、かつてMacaulayが最大の讃辞を呈し、⁽²⁾それをClas-
senがかの名著の誉れ高い註釈書の第7巻の扉に題辞として引用した、そういう文である。曰く、「私は断言いたします。ツキジデスの第七巻こそ世界最高の散文、これに比すればデモステネスの『王冠』ですら一籌を輸す、小生はそう考えます。これぞ人類学芸至高の極みです(ne plus ultra)。」

一方、同じHCT, Vol. Vにこれも長大なAppendix 2を書いたDover先生によれば、「IIIやIVを読んだ人が、そのあとでVIIIに目を転ずるならば、そこに理屈を述べたり個人的な意見を表明したりする語句が多いことに驚くであろう」ということになる。⁽³⁾ただし、Dover先生自身そこで注意しておられるように、こういう語句は決してVIIIに特有というわけではなく、問題はむしろ、それがVIIIに集中しているように思えるということであり、また、先のAndrewesによれば、VIIIはツキジデスの歴史著作の最初の段階を示しているというから、⁽⁴⁾この二人——Dover, Andrewes——の意見を単純につなげると、ツキジデスは、

草稿の段階では理屈を述べたり感想を交えたりしていたが、考え直したり加筆したりして行く過程でそういうものを消して行ったと思える、ということになる。

VIIIについての私自身の印象もほぼこれに近いが、私の場合はツキジデスの個人的意見よりは、先にも述べた索然たる思いの方がいっそう強い。ツキジデスの文章は息が長く、その上彼独特の言い廻しが多いために難解だというのは有名なことだが、その代り、一種の謎解きめいた面白味とか、彼の思考の組立てが読みながら見て取れるという緊張感がある。然るにこのVIIIの文章、少なくともその§7以後のおよそ30節ばかりは、そうではない。第一、一つ一つの文が短い。だから読み易いが、その代りこれを書いている人間の息づかいを聞く思いがするなどということはない、というのが私の印象である（途中アルキピアデスが再び登場する辺りからしばらくは、文章は再び長めになり、文体もツキジデス流に戻っている、という印象も私は持っている）。それともう一つ、*-sis* 名詞の（概念語としてのでなく）動名詞としての用例が、他の巻に比べるとここには極端に少ない、という知識を私は持っている。⁽⁶⁾ このことは上に述べた文の調子の低さということと思い合せるならば、VIIIはやはり Andrewes の言う通り草稿の段階で、こういう文を次第に練り上げてツキジデスの文章というのが出来るのだろうか、という想像に我々を向わしめる。

2

そこで本稿では、まず Andrewes, Dover 両氏の印象を確かめることから始めることにする。もっとも Dover 先生は実は「主観を表す語句」とは言っていない。「主観を表す要素」と言っている。しかしいきなり ‘elements’ では余りにも何もかも含まれすぎるので、主観を表す語句を扱う。個人的な考えや感情を表し得る語句の頻度を調べることから始めたいと思う。その語句を大まかに言って2種類考える。一つは「動機を表し得る動詞」で、これには前号で扱った「動機を表す分詞構文」の分詞は当然含まれるが、今回は定動詞をも含むことにする。ただし、前号で述べた、当面の語が果して動機を表しているかどうかの判断は非常にむずかしい。前回同様の不確かさがつねにつきまわっている。その代り動詞の種類と数を限定する。(1)「…と思う」という意味を表す動詞(νομίζειν, οίεσθαι, ἠγγεῖσθαι, διανοεῖσθαι)、(2)「…したいと思う」「…するだろうと思う」(βούλεσθαι, ἐλπίζειν)、(3)「…ではないかと恐れる」(δεδιέναι, φοβεῖν)

がそれである。選択の基準は、この三つの意味のいずれかを表す動詞で、全巻を通じて30回以上使われているもの、ということにした。いずれの動詞も登場人物の心の動きを言い表すものであり、彼らは心がそう動いたので行動することになるわけだが、ツキジデスがそれぞれの人物の心の動きをどこまで確実な知識として知った上でその動詞を使ったのかは不明であっても、少なくとも彼が、その人物の心がそうはたらいたと思ったのでなければその動詞は使わなかったはずなので、彼の主観には関わっている。

さらに註をつけると、(1)の動詞のうち1人称を主語とするものは別項へ移した。これはツキジデス自身が「私は…と思った」と言っているので、登場人物の行動の動機ではなく、ツキジデスの主観そのものを表しているからである。すべての動詞——特に(1)の動詞については、単純に対格のみを伴っている場合は取捨選択に際してかなり厳しく考え、結局捨てた場合が多かった。それに対して *ὅτι* 等に導びかれた従属節、あるいは不定法句を伴っている場合には、ほとんど拾い上げる結果となった。逆に上記の動詞自身が従属節の中にあたり不定法になっていたりする場合はまたかなり用心して、これもほとんど捨てることになった。

もう一種類の項目は(4)で、ここには「明かに…である」「…と思える」「…らしい」「当然…である」という意味の語(動詞とは限らない)を含めた。これは登場人物のではなく、ツキジデス自身の心のはたらきに直接に関わるものである。ここにも註をつけると、*δηλόν* (*εστί*) の項には *δηλοῖ*, *ἐδηλοῦντο* 等が混入している。ただし、「明かにする(している)」と言っても、いずれかの登場人物が別の登場人物に対して何かを明らかにしていることが明白に示されている場合は勿論除外してある。*δοκεῖ* のうち、*δοκεῖ μοι* という句を成している場合は、先程の(1)の動詞で1人称を主語とするものと共に、同じ(4)の「1人称」という項に配した。なおここにはこの他に I 22.2 の *ἡξίωσα* をも含めた。⁽⁶⁾「仮定文」という項を別に立てたのは、「もし…だったら…したことだろう」というのはツキジデスの明白な主観の表白だからである(いわゆる *potential optative* もここに含めてある)。

ツキジデスの主観を表し得る語句は勿論これに止まらず、他にいくらかも挙げることができよう。例えば *αἰτίου* (時に *αἰτία*) *δ᾿ ἦν* 「原因(理由)は…というのだった」というのは間違いなくツキジデスの解釈を示していて、5回出て来るが、これを拾ったら、「…というものはとかく…するものだが」というのも数回出て来て、これもツキジデスの見解だと言えるだろうし、その他「語る

に足りる」などという形容詞もツキジデスの意見の端的な表明で、殊にそれが最上級だったりしたらなおさらそうだ、ということになって、到底ここでは扱い切れないほどにひろがって行くだろうと恐れる。なお、はじめに断わるのを忘れたが、次の表（のみならず以下本稿を通じて）の数の中には、演説（たとえ間接話法によるのでも）と引用文の中の用例は含まれていない。それらはツキジデス自身が選んだ用語ではない（かもしれない）からである。

さて、まず下端の「計」の欄を見ると、VIIIの128例というのは確かに最も多いが、しかしほとんど差とも言えない僅かな差で、それも、事もあろうにIVの122というのがつづいているのを見ると、一体 Dover 先生の印象とは何だったのかと訝しまれて来る。もっとも、これらの数は実際の数だが、各地の行数、それ

表 1

	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	
(1)	νομίζειν	18	12	13	29	32	9	27	24
	οίεσθαι	2	5	2	11	4	4	5	5
	ήγγεσθαι	3	2	6	7	3	2	5	2
	διανοεῖσθαι	3	3	0	6	4	5	4	13
小 計	26	22	21	53	43	20	41	44	
(2)	βουλευσθαι	12	17	13	21	15	14	17	30
	εἰπίζειν	3	5	0	8	4	3	2	4
小 計	15	22	13	29	19	17	19	34	
(3)	δεδέεσθαι	13	7	16	12	12	7	5	11
	φαθεῖν	5	7	6	14	5	4	2	8
小 計	18	14	22	26	17	11	7	19	
(4)	δηλον	8	1	2	0	1	0	0	0
	δοκεῖ	7	11	5	2	6	11	7	13
	φαίνεσθαι	17	6	4	3	2	5	5	6
	εἰκός	3	8	0	5	1	5	8	5
	一人称	12	2	3	0	0	2	0	4
	仮定文	9	2	3	4	2	2	1	3
小 計	56	30	17	14	12	25	21	31	
計	115	88	73	122	91	73	88	128	

も演説等を省いた行数には少なからぬ違いがあるから、それを考慮して各巻のこれらの語全体の頻度を算出すると、

I : 15行につき1、 II : 19、 III : 19、 IV : 18、 V : 18、 VI : 19、

VII : 19、VIII : 16となつて、要するに大した差ではないと同時に、これでも Dover 先生の印象とは違ふし、私が受けていた印象とも違ふ。私は「大した差」があると思つていたのである。統計の結果がこのように印象と違ふのは世間の到る所でのべつ起つていて別に異とするに足らぬと言うなら、それは認めてもよいし、場合によっては、たとえ不正確でも印象の方が大事だということもあると言うのなら、それも認めてもよい。しかしそれでは議論が先へ進まないから、もう少し辛棒することにする。

「表1」の示す数や上記頻度数が印象と違ふ一つの理由は、先刻も述べたように、ツキジデスの主観を表していそうな語句でここに拾わなかつたものが多数あるということだろうと思われるが、もう一つ、語句と言わず文全体がそれに関わっている場合も少なからずあつて、例えばVIII 24.4の「私の知る限りでは、キオス人のみが、ラケダイモン人について、繁栄の中にあつて同時に健全なる施策をも行なつた唯一の国民だからであつて…」の中には、「表1」で対象とした語句は一つも含まれていないが、これは紛れもなくツキジデスの解釈すなわち主観を示したものだだろう。そしてこのような例は我々の印象を形成するのに強力に作用するだろうし、反面、単に語句の頻度を調べたぐらいでは、洩れ落ちるものが多くて仕方がないのではないかという警告にもなる。

こういうことを承知の上でも少し「表1」を見ることにする。少なくとも何らかの目安ぐらいにはなるはずだと期待する。(1)の動詞はIVに、(2)の動詞はVIIIに、(3)の動詞はまたIVに多いが、(4)の語(句)は断然(1)に多い、ということがすぐ見えて、これは覚えておくべきこと(イ)とする。そして、(1)―(3)の動詞と(4)の語句の間には上に述べたような違いがあり、(4)はツキジデスの主観にじかに関わっているから、その(4)の語句の多いIが、他の巻よりもツキジデスの個人的見解を露わに示している文章を多く含んでいる、ということになりそうだが、この段階でそこまで言つてしまうのは尚早であろう。

3

しかし「表1」の示す結果が、我々が読んだ時に得た印象と違ふのには、もう一つ理由があると思える。それは「表1」が各巻別の集計表になっているこ

と自体にある。そこでもう一度、もう少し細かい区切り方をして分布を調べたら多少は違う結果が出て来るのではないかと期待する。それというもの、私の漠然たる記憶では、巻よりは余程小さな単位で、比較的集中的に同じ語が使われているという印象があるからなのだが、一方、細かいとは言っても、余り細かく分けてしまつては、煩しいばかりで意味のある結果が得られなくなる恐れがある。そこで「表2」に示すように、A1、A2、A3…という区分けを設定して、全体を26区分する。A、B、Cというアルファベットは、ほぼ巻別に相当する。A—Dは完全にI—IVに当たっている。実はこの26区分はツキジデスの記す戦争の年度の切れ目を基準にしているのだが、⁽⁷⁾ I—IVは巻の切れ目に丁度年度の切れ目が来ているからそうなるのである。だがVIのはじめはVの終りの年度のつづきなので、E5の末尾はVIに食い込み、F4の末尾はVIIに食い込み、G2はVIIIのはじめの7節である。

- A1： I 1—23。序文（419行。ODT版による。例によって演説等は省く。
以下同様）
- A2： 24—88。ケルキュラ・コリントスの紛争（544行）
- A3： 89—118.3。「五十年史」（491行）
- A4： 118、3—145。上記紛争をきっかけにしてアテナイ・スパルタの対立表面化（315行）
- B1： II 1—47、1。戦争1年目。終りに有名なペリクレスの戦死者葬送演説。ただしここでは省く（616行）
- B2： 47、2—70。戦争2年目。アテナイの疫病流行（388行）
- B3： 71—103。戦争3年目。プラタイアの攻防（679行）
- C1： III 1—25。戦争4年目。ミュティレネの反乱（304行）
- C2： 26—88。戦争5年目。ケルキュラの内乱（577行）
- C3： 89—116。戦争6年目（523行）
- D1： IV 1—51。戦争7年目。スパクテリア攻防（878行）
- D2： 52—116。戦争8年目。ブラシダス登場（965行）
- D3： 117—135。戦争9年目（386行）
- E1： V 1—12。戦争10年目（218行）
- E2： 13—26。「ニキアスの平和」「第2序文」（203行）
- E3： 27—51。戦争11—12年目（507行）
- E4： 52—81。戦争13—14年目（491行）
- E5： 82—VI 7。戦争15—16年目。Vの終りの「メロス談判」省く（221行）

表 2

	1				2			3			4					計	頻度数 ~行に つき1			
	uqurzeu	äeöbu	tyeöbhu	öameiöbu	小 語	Böuquor	äurzeu	小 語	öeöbu	göbhu	小 語	öyöu	öuei	gäueöbu	éuös			一人称	假 定 文	小 語
A 1	1	2	1	1	5	1	1	2	0	0	0	7	9	10	3	12	9	41	48	8.7
A 2	6	0	1	1	8	6	0	6	9	3	12	0	2	1	0	0	0	3	29	18.8
A 3	7	0	1	1	9	4	1	5	1	2	3	0	2	4	0	1	0	7	24	20.5
A 4	4	0	0	0	4	1	1	2	3	0	3	1	2	2	0	0	0	5	14	22.5
B 1	4	2	0	1	7	5	1	6	1	2	3	0	6	4	3	1	0	14	30	20.5
B 2	2	0	1	0	3	2	1	3	4	0	4	2	0	2	3	0	0	7	17	22.8
B 3	6	3	1	2	12	10	3	13	2	5	7	0	5	0	2	0	2	9	41	16.6
C 1	3	0	3	0	6	4	0	4	2	1	3	0	0	2	0	0	1	3	16	19.0
C 2	4	0	1	0	5	3	0	3	7	2	9	0	2	2	0	0	1	5	22	26.2
C 3	6	2	2	0	10	6	0	6	7	3	10	2	3	0	0	3	1	8	35	15.4
D 1	9	5	1	1	16	7	6	13	3	5	8	0	1	1	3	0	0	5	42	20.9
D 2	13	4	4	3	24	11	2	13	7	5	12	0	0	2	1	0	3	6	55	17.5
D 3	7	2	2	2	13	3	0	3	2	4	6	0	1	0	1	0	1	3	25	16.1
E 1	5	2	2	1	10	3	1	4	3	0	3	1	1	2	0	0	0	4	21	10.3
E 2	7	0	0	0	7	2	0	2	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2	11	16.7
E 3	12	2	1	1	16	5	3	8	6	4	10	0	3	0	0	0	0	3	37	13.7
E 4	7	0	0	2	9	5	0	5	3	0	3	0	2	0	0	0	1	3	20	24.6
E 5	1	0	0	0	1	2	0	2	0	1	1	0	0	1	1	0	0	2	6	36.8
F 1	3	1	1	0	5	3	1	4	2	1	3	0	2	1	2	0	1	6	18	22.8
F 2	1	4	0	0	5	3	1	4	1	1	2	0	4	2	0	2	2	10	21	8.6
F 3	1	0	0	2	3	2	1	3	2	1	3	0	2	1	1	0	0	4	13	27.3
F 4	9	0	2	2	13	4	0	4	1	2	3	0	3	1	2	0	0	6	26	9.1
G 1	21	5	4	4	34	17	2	19	5	1	6	0	6	4	7	0	1	18	77	19.5
G 2	3	0	0	2	5	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	7	20.7
H 1	9	0	1	8	18	17	2	19	7	2	9	0	7	4	0	2	0	13	59	16.4
H 2	12	5	1	3	21	12	2	14	4	6	10	0	6	2	5	2	3	18	63	17.0

総計 778

- F 1 : VI 8—53. 戦争17年目。以下「シシリー戦記」がVIIの終りまで(410行)
 F 2 : 54—61。「シシリー戦記」中に挿入された僭主政治論(180行)
 F 3 : 62—93. シシリー戦記再開(327行)
 F 4 : 94—VII 18. 戦争18年目。シシリー戦記(469行)
 G 1 : VII 19—87. 戦争19年目。シシリー戦記。最後にアテナイ軍降伏(1,483行)
 G 2 : VIII 1—6. シシリーでのアテナイ軍降伏の余波(145行)
 H 1 : 7—60. 戦争20年目(965行)
 H 2 : 61—109で中断。戦争21年目(1,068行)

この表もまた、実際に用いられた語数から得られる印象と算出された頻度の間には、意外なほどの違いがあり得ることを所々で示している(例えばA 1、D 2、H 1、H 2、それとG 1)。先に「表1」でIVに意外なほどこの種の語が多いと知ったわけだが、それは主としてD 2とD 3、つまりIVのうちでもブラシダスが登場してからの記述でそうなのであり、それも特に *νομίζειν* と *βούλεσθαι* の多用によっているのだということとか、Iにこの種の語が多い(頻度ではF 2に次いで2番目)のは、問題なくA 1、すなわち序文のおかげであり、それも(4)の語句が決定的に多くここに集中しているせいだ、などということとかも分る。この最後の件は特筆大書に値することで、これを覚えておくべきこと(ロ)とする。因みに、ツキジダスの(4)の語句の用例は206で、そのうち42、つまり20%余りがここに集中しているのである。

頻度というのは確かに曲者で、例えば30行(これがOCTのツキジダスの1頁の平均行数である)読んだ時に何かに2回出逢うのと、150行(つまりOCTで5頁)読んで10回出逢うのとでは、どちらがそれに余計出逢ったと感じるか、というようなことがある。しかしそれは印象の問題で、今我々が問題にしているのは(確かに印象を一つの手がかりにはしたけれども)印象ではなくてツキジダスの語の使い方なのだから、これは今は問題にする必要はない——そう考えて、「表2」の頻度の欄の、数の小さい方(つまり頻度の高い方)から機械的に順に並べてみる。1. F 2、2. A 1、3. F 4、4. E 1、5. E 3、6. H 1、7. C 3、8. D 3、9. E 2、と、ここまでがツキジダス全体の主観を表し得る語の平均頻度(17.5)を上廻っている区分である(あとの17区分は無論すべて平均以下で、これから見ても、ツキジダスが主観を表し得る語を想像以上に頻繁に使用したことが分る。これを覚えておくべきこと(ハ)とする。)⁽⁸⁾ 所で、上の9箇所のうちはじめの二つ、すなわち1のF 2と2のA 1は、それぞれVIの「シ

「シリー戦記」の中に挿入された「僭主政治論」と全巻冒頭の序文で、つまりこれらは「史」であるより「論」であって、従ってこれらの箇所主観を表す語彙が豊富になるのは当然だということになるかどうか。それは俄には言えないと思う。いちいちそれらの箇所に当って見るまでもなく、上の9箇所の表を見ただけでもそれは分ることで、第3位のF4、これはVIの最後の部分で、かなり読者をいらいらさせながらも、シシリーの戦況はまだアテナイ軍にとって有利だった時分の描写であり、勿論「論」ではない。そして次のE1も、その次のE3も「論」ではない。それどころか最後のE2（「ニキアスの平和」と「第2序文」）を除けばみな「論」ではない。こうして見ると、F2とA1は「論」だから云々というのは、それ自体としては理解し易いけれども、それ以外のほとんどが「論」ではないのに主観を表し得る語の使用頻度が、ツキジデス全体の平均頻度を上廻っているのはなぜかという説明をしなければならないだろう。こうなったら個々の箇所に当ってみる他ないではないかと思えて来る。

しかしその前に、ツキジデスの中には「史」であるよりは「論」だと言える箇所が上記の3箇所（E2、A1、F2）以外にもまだあるので、先にそちらに注目しておく。ただし、注目するのは、あくまでも「箇所」と名づけられる程度の長さのある箇所に限る。

1. I 138.3—6 (A4): テミストクレス評
2. II 51—3 (B2): 疫病流行のもたらしたアテナイ人心の荒廃
3. II 65. (B2): 民衆およびペリクレス評
4. III 82—4 (C2): 内乱の悲惨さ
5. IV 40 (D1): スパルタ観
6. IV 65.3—4 (D2): アテナイ市民の過信
7. IV 80—1 (D2): スパルタとブラシダス
8. IV 108.1—6 (D2): アムピポリス陥落
9. V 14—6 (E2): 休戦の気運
10. VI 24 (F1): アテナイ人シシリー遠征に熱狂
11. VI 31 (F1) 遠征のための膨大な軍備
12. VI 52.2—3 (F1): 石像破壊事件
13. VI 69.3 (F3): シシリーに参戦した各国の思わく
14. VII 71 (G1): 海戦を見守る両軍の陸兵たちの思い
15. VII 75 (G1): アテナイ軍の惨状
16. VIII 1—2 (G2): シシリーのアテナイ軍降伏の余波

17.VIII 24.4—6 (H 1): キオス人観

18.VIII 66 (H 2): 寡頭派の実体

19.VIII 96.5 (H 2): アテナイとスパルタ、アテナイとシュラクサイの対比。これらの箇所全部が「論」だと言っては異論も出よう。しかしそれなら、これらはすべて Excursus、つまり、ツキジデスが歴史叙述の筆を一旦下して、何かを論じたり説明したりしている箇所だと言えよ、いずれにせよ彼の主観がこれ以外の箇所よりは色濃く出ているはずの箇所だと言ってもよい。

所が驚くべきことに、これら19箇所 (F 2とA 1を加えるならば21箇所)のうちで、上に挙げた「主観を表し得る語を平均より多く含んでいる箇所1—9」の中に入っているのは、9番のE 2、休戦の気運を説明する所と、17番のH 1、キオス人を論ずる所の計2箇所しかない。言い換えれば、ツキジデスの主観が色濃く出そうな箇所19中2箇所 (A 1、F 2)を加えるなら21箇所中4箇所)だけが、現に主観を表し得る語を他より余計に含んでいる、ということである。ツキジデスのある箇所が「論」じているからと言って、必ずしも主観を表し得る語が多く使われているとは限らない、むしろそうならないことの方が多い、少なくとも、論じるということと(4)に掲げた主観を表し得る語を使うということの間には必然的な相関関係はない、と認めることになって、これを覚えておくべきこと (二) とする。

4

相変わらず「表2」を見つづけることにするが、今度は見方を少しだけ変えてみる。折角箇所の方を26区分に細分したのだから、語の種類の方も別けて考察したらどうなるか、ということである。しかし語の種類の方は細分する必要はなくて、(1)―(3)の「動機を表しし得る動詞」と(4)のツキジデスの主観により直接に関わりを持つ語の2種である。現に我々は上で、「覚えておくべきこと(ロ)」としてA 1という区分に(4)の語が殊更に多いことに注目したのである。そこで(1)―(3)を多く含む箇所、(4)を多く含む箇所を、頻度数によって高い順に「表2」から抜出して並べてみる。右端の数字がその頻度で、～頁につき1例の割を示している。またカッコでくるんだものは、用例数が1桁でしかないので、計算上はとにかくこうなるが、ここから何かを即座に判断することは避けた方が無難だろうという、保留の意を表している。

表 3

(1)―(3)			(4)		
E 1	17例	13	A 1	41例	10
E 3	34	15	F 2	10	18
F 2	11	16	B 1	14	44
D 3	22	18	(E 1	4	54)
C 3	26	20	(B 2	7	55)
D 2	49	20	H 2	18	59
(E 2	9	20)	(A 4	5	63)
A 2	26	21	(C 3	8	65)
B 3	32	21	(F 1	6	68)
H 1	46	21	(A 3	7	70)

このうち(1)―(3)については特に問題はない。強いて一つだけ言えば、一見多そうなG 1 (59例)は頻度の点では25で、実は多くはない、そしてG 1とはVIIの大半だということを思えば、これは少し意外だ、ということであろう。これに対して(4)の語句の頻度の方はそうは行かない。まずここに挙げられた「多い」区分10箇所のうち6箇所までがカッコつきで要注意だということ、次に、A 1の10行につき1、F 2の18行に1はよいとして、3番目のB 1の44行に1となると、果して多いと言うべきかどうか迷う。因みに44行に1例という頻度は、(1)―(3)の動詞ならば26区分中下から3番目なのである。これは(4)の語句がもともとさして多くないのを多い順に並べたからこういうことになったのであって、A 1、F 2以外はまず問題とするには当たらないであろう。

この「表3」から言える恐らく唯一のことは、「動機を表し得る動詞」の方は各区分間に比較的小となしかならかな差で分布している(つまりほとんどつねに使われている)のに対し、ツキジデスの主観を直接に表しているような語句はA 1、すなわち全巻の冒頭とF 2、すなわちVIのExcursusの中に集中し、あとは所々に散見されるだけ、という分布の仕方をしているということである。参考までに、(1)―(3)の方の各区分の頻度数の最高は13行につき1、最低は60行につき1であるのに対して、(4)のそれは最高10、最低181という物凄い落差である。しかしその最高10はA 1で、最低181というのはA 2なのだから、この落差は全く劇的と呼んでもよい。

5

所がその劇的な落差というのは、全くあっけない幕切れになる。A 1、A 2 などと言うから劇的になったのであって、一体そのA 1は何であるのかを、ちょっと立止まって考えればよい。すなわちA 1 = I 1 - 23 = 序文と思うからいけないのであって、実はこの「序文」のうちの大半、つまりI 2 - 20、はいわゆる「古代史」と呼びならわされている部分だと気がつけば、事情は簡単に了解できる。因みに(4)に分類されるA 1の語のうち「古代史」に属するのは次の通りである。δηλοῦνの諸形6、δοκεῖ μοι 5、φαίνεσθαιの諸形9、εἰκός 3、仮定文7。これらの語がここにこれだけ用いられた理由は、これらの語を含む文が、古い時代のことを述べていることに帰することができる⁽⁹⁾ (例外は10.2のφαινοῖν ἄνと10.3の ὁμῶς δὲ φαίνεταιで、これは述べられている時代の古さには関係がない)。この結果A 1で(4)に属する語のうち、古い時代のことを述べていることに関係がないのは21.2のδηλώσει、22.1のὡς δ' ἔδοκον ἐμοίと22.2の αὐδ' ὡς ἐμοὶ ἐδοκεῖ、上記2箇所 of φαίνεσθαι、それと22.4の φαίνεταιだけだということになり、もしツキジデスが「古代史」を書かなかつたら、A 1はI 1と21-3だけが残り(59行)、そこに含まれる(4)の語は4、15行に1例の割ということになる。こうしてA 1に(4)があふれている理由は、(1) 2-20のものほとんどは古い時代のことを述べるゆえに、21-3のものは「論」なるがゆえに用いられたためであると整理することができる。

F 2に目を転じよう。⁽¹⁰⁾ ここは4部に分けて見ることができる。(a) 54と55、(b) 56-8、(c) 59と60、(d) 61である。(a)はDover先生が'strongly polemical tone'が著しいと註をつけた所で、⁽¹¹⁾アテナイの僭主政治を倒したのは、普通ハルモディオスとアリストゲイトンの英雄的行動だとされているが、元をただせばこれは恋愛沙汰だったのだということ、それともう一つ、ペイシストラトスの後継者となったのはヒッパルコスだと普通信じられているが、実はそうでなくてヒッピアスだったのだということを論じている。内容上の特徴として、一般に流布している考え方に対して異説を立てている所と言ってよい。(b)は、ハルモディオスとアリストゲイトンの両名は実際に何をやったのかを叙述している。(c)はこの両者の蜂起計画は失敗に帰し、これを機に僭主政治が独裁の色彩を急に強めて来たと言明し論じている。(d)は上のような背景がある所で、アテナイ人がアルキビアデスにどう対したか、アルキビアデスはどうかの説明である。先程の「論」と「史」という区別の仕方を利用すれ

ば、(いずれの場合もどちらかと言えよという程度にはあるが) a は論、b は史、c は論で d は史、というように別けられよう。まず a について。54.1の冒頭に *ἐγὼ…ἀποφανῶ* 「私が明かにしよう」と強烈な言葉が出て来る。アテナイ人は少しも厳密に正しいことを伝えていないからというわけである。54.2に行くと「多くの人々は考えている (*οἴονται*) ようだが」と言い、そこへ行くと私は余人よりも正確な伝聞を知っているから断固主張するのだが… (55.1) とつづけ、ペイシストラトスの嫡子で、ヒッピアスにだけ子供が出来たらしい (*φαίνονται*) と紹介し、そのことは正に次のようなことから知れよう (*γνώμη δ' ἄν τις καὶ αὐτῷ τοῦτῳ*) とも言う。55.3は「もしヒッパルゴスが支配者の地位にあって殺され、いきなり即日ヒッピアスがその他位に即こうとしたとて、容易にその地位を手に入れることができたらうとは到底私には思えない (*οὐ μὲν αὖθ' ἂν κατασχεῖν μοι δοκεῖ*)」と言っている。——こうして (a) には (4) に属するものとして 1 人称 2、仮定文 2、と (1) に属するものとして *οἱ πολλοὶ οἴονται* という主張とがある。(b) は二人の行動の具体的叙述であって、56.3に *ἤλπιζον*、57.2に *ἔδεισαν καὶ ἐνόμισαν*、57.3に *ἐβούλοντο*、58.2に *οἴομενοι* と、いずれも二人の行動の動機を表す動詞が 5 個ある。(C) のうち §59 は、その後のヒッピアスの行動を記し、動機を表す句は 3 例 (59.1 *δ' ἐρωτικῆν λυπῆν*、2 *διὰ φόβου*、3 *αἰσθανόμενος*) であるが、いずれも今回の「表」には含まれない。§60 では 1 に *αὐτοῖς ἐδόκει*、4 に *ᾔετο*、5 に *ἄδηλον ἦν* とあり、4 に単に *ᾔετο* 1 語でなく、この節全体がツキジデスの解釈を示している。——こうして (c) では (1) に属するもの 2、(4) に属するもの 3 が見られる。(d) では 61.6 アテナイ市民たちが石像に関する一件をはっきりさせたと思った (*ᾔοντο*) と言われ、アテナイ市民たちにはアルキピアデスが…し、また…しているものと思えた (*ἐδόκει*、共に 61.2) と言われ、同じアテナイ市民がアルキピアデスを裁判にかけて処刑しようと思んだり、あるいはマンティネアやアルゴスからの援軍を手離たくないと思んだり (共に *βουλόμενοι*、共に 61.5) して…したと言われている。一覧表にすると次のようになる。

(I)	(1)–(3)	1、	(4)	5	論
(II)		5		0	史
(III)		2		3	論
(IV)		3		2	史

F 2 の主観を表し得る語の分布は、論の部分では (4) に該当するものが、史の部分では動機を表すものが優勢だという至極当り前の様相を呈していることになる。

かくて、A1とF2における(4)の語彙の豊富さは、「古代史」と「論」という二本の柱で支えられているということがほぼ明らかになった。⁽¹²⁾

しかしどうもおかしいと思うのである。動機を表す動詞は比較的なだらかな起伏で全巻に分布し、ツキジデスの主観により直接に関わる(4)の語句は(1)古い時代のことを述べる所か(2)論ずる箇所に集まりがちで、そういう所には動機を表す動詞は多くない——こんな当り前のことを言うために大変な手間と時間をかけたという思いがする。サムプリングが悪かったのか、片々たる語や語句を拾っただけでは目安にもならないのか。

ここで思い出されるのが先程註(9)でちょっと触れた *ὁμως* という副詞で、私はこのことを偶然発見して、印象が深かったものでその後もずっと忘れずにいるのだが、実はこの副詞は、I 3.2から23.1までの間、つまり我々のA1の中で8回使われた後、次は105.6まで全く使われていないのである。A1: 8、A2: 0、A3: 1、A4: 2という分布で、これは先に見た(4)の語句の分布を思わせないだろうか。特にA1とA2の顕著な違いという点は正にそうであろう。しかも(4)の語句ならば「古い時代のことを述べる箇所」とか「論じる箇所」というような箇所の特性に左右されることもあろうけれども、*ὁμως* 「それでもやはり」「それにもかかわらず」というのではそういうこともなく、どのような箇所でも場面でも、筆者が「それにもかかわらず」と思いさえすれば使えるはずだ、従って、A1で8回も使ってA2で0(別の言い方をすると、OCT版で言うところのIのはじめの11頁で8回使った副詞を、その後の47頁もの間全く使わない)のみならず、その後も第I巻の終りまでほとんど使わずに済ませたのには何が事情があるはずだと期待する。

とりあえず、23.1から105.6までの間 *ὁμως* を一度も使わずに済ませた事情から始める。まず考えられるのは、*ὁμως* に代る別の語を使ったのではないかということ、誰でも思いつくのは *μέντοι* という小辞だろう。^(12a)そして案の定ツキジデスはこれを使っているのである。ただし2度(66、92)だけである。それではツキジデスは、これ以外には「それにもかかわらず」と言う機会を見出し得なかったのだろうか。そんなことはないだろうと思う。

まず1箇所を選んで検討してみる。49.7。その文は「アテナイ軍はケルキュラ軍が押され気味なのを見ると、今やいっそう露骨に加勢し始めた。しかしそれでもはじめは、(敵の)船に攻めかかることはしないよう自制していたが、やがて…」というのであって、この後半部、「しかしそれでもはじめは…」という条を、ツキジデスは分詞構文で書き (*τὸ πρῶτον ἀπεχόμενοι ὥστε μὴ…*)、その後 *ἐπεὶ*

δὲ…、τότεと付ける。この「しかしそれでもはじめは」というのは、ツキジデスさえその気になれば ὅμως が使える典型的な文脈だろう(ὅμως δὲ τὸ πρῶτον ἀπέχοντο)。ツキジデスがそうしないで分詞構文にしたのは、それよりはむしろ τὸ πρῶτον と ἐπεὶ δὲ…、τότε の対照の方を際立たせるためである。ὅμως を使えば「露骨に加勢し始めた」とことと「それでも自制はしていた」とことが対照され強調されるが、ツキジデスは、それよりは「はじめは」と「…するややがて」との対照の方を重んじたのである。しかも ὅμως では対句にならないが、τὸ πρῶτον…、ἐπεὶ δὲ…、τότε なら対句になる。

私見では(これと全く同じではないが) 23.1—105.6には ὅμως を使えそうな箇所があると数箇所はある。挙げてみよう。44.1 (ツキジデスは μὲν…δὲ…と軽く、しかし対句で受けている)、49.1(冒頭の所。分詞構文と μὲν…δὲ)、63.2(終りの所。δέ 1 語で済ませている)、90.5 (分詞構文による)、95.5 (μὲν…δὲ…)、97.2 (「脱線は承知だがしかし…」という所で、その気持を καί という副詞一つで表した)。まだ他にもあるかも知れないが、この辺までなら安全であろう。

もう一箇所見ておこうか。IV96.9からV32.5まで ὅμως が現れない、これも長い空白だからで、今と同じように ὅμως が使えそうな箇所を探してみる。104.3 (意表をつかれた感じのする ὅμως で結ばれている)、⁽¹³⁾108.6 (ὡς: cf. LSJ, A III)、113.1 (絶対属格)、115.1 (104.3のと似た καί)、125.1 と 128.5 (共に μὲν…δὲ…の対句)、132.3、134.2、135.1 (いずれも μέντοι)。

両方の箇所を通じて言えることは、我々が ὅμως を使いそうな所をツキジデスはもっと軽く、分詞構文や δέ でつないでいる場合が多く、特に目立つのは対句構成であり、ὅμως よりはそのちらの方を好んでいるようだ、ということである。しかし一方対句構成は、ὅμως を使う際に表明される主観を消してしまうという効果も持っていることは覚えておくべきであろう。勿論、ツキジデスがはじめ ὅμως を使って書いた文を後に対句に書き改めたのだと言うつもりはない。しかし A 1 で多用された ὅμως が使われたのと同じ、あるいはほとんど同じ前後関係を表すのに、一つは分詞構文という軽く流す方法が、一方では対句表現が A 2 で用いられているという点に、文章表現を抑制したり整えたりしようとする努力が見られると私は思うのである。⁽¹⁴⁾ 念のため、A 1 に属する ὅμως で、「古代史」の部分で使われているものは 5 例であり、その中で、語られる時代の古さが原因で「それにもかかわらず」とツキジデスに言わせているのは 2 例(9.2と18.1) だけであって、つまり「古代史」は A 1 に ὅμως が多いことの

原因にはなっておらず、むしろA2以下にツキジブスの文章を書く技術が発揮されて *ὄμως* が減った、というのが実情であろうと想像する。

7

ὄμως とそれとほとんど同じ気持を表す小辞の *μέντοι* は、前にも言ったように消極的ながら主観を表明している。これは論理的におかしい、あるいは不可解だと思いつつも、しかし事実がこうなのだからという気持が「それでも」や「それにもかかわらず」になるわけである。ある事実を合理的に解釈しかねている態度がここに出ている、そういう意味で主観に関わりを持っているからである。そう見て来ると、*ὄμως* と *μέντοι* は今や別扱いするには及ばなくて、(4)の語句の一項として加えてよいと思われる。そうやって「表2」「表3」の改訂版をここで作る方がよいと思う。(1)―(3)の動詞を表す動詞は計8語であり、今(4)に *ὄμως* と *μέντοι* を加えることによってこちらも8語になるというのも好都合であろう。(4) + *ὄμως* + *μέντοι* を仮に「主観語」と呼ぶ。「表4」はこの「主観語」、そして「表2」から(1)―(3)の部分抜き出して対比させたものである。表中「頻度」は今までと同じく、～行につき1例という行数である。「順位」の欄に○がついているのは頻度が高い区分(上位10位まで)、×がついているのはそれが低い区分(20―26位)、何の印もついていないのは高くも低くもないということである。

この表で面白いのは、各区分ごとの○と×の関係である。例えば、A1では、「動機」の方が×で「主観語」が○、A2では逆に「動機」が○で「主観語」が×になっている。こういう関係にあるものを拾い出してみると結構沢山あることが分るだろう。

A1、A2、A4、B1、B2、B3、D2、D3。

しかしよく見ると、「動機」の方のC1は○に極めて近いから以上に準じると考えて差支えないし、E2の「主観語」の少なさもほとんど×と言ってよく、F1の「動機」の方もそうだというわけで、これらを上につけ加えて、

A1、A2、A4、B1、B2、B3、C1、D2、D3、E2、F1 ……①とする。「動機」と「主観語」の両方に同印がついているのはE5とF2だけだが、E3はあと一息で「主観語」の方が○になると考えればこれも加えて

E3、E5、F2 ……②

表 4

動機を表す動詞			区 分	主 観 語		
例 数	頻 度	順 位		例 数	頻 度	順 位
7	60	× 26	A 1	50	8	○ 1
14	21	○ 8	A 2	4	136	× 26
17	29	17	A 3	10	49	13
9	35	× 21	A 4	9	35	○ 6
16	39	× 23	B 1	20	31	○ 3
10	39	× 23	B 2	12	32	○ 4
32	21	○ 8	B 3	11	62	× 20
13	23	11	C 1	4	76	× 22
17	34	19	C 2	10	58	17
26	20	○ 5	C 3	9	58	17
37	24	12	D 1	7	125	× 25
49	20	○ 5	D 2	11	88	× 23
22	18	○ 4	D 3	6	64	× 21
17	13	○ 1	E 1	4	54	14
9	20	○ 5	E 2	3	61	19
34	15	○ 2	E 3	11	46	11
17	29	17	E 4	11	45	○ 10
4	44	× 25	E 5	2	111	× 24
12	34	19	F 1	10	41	○ 8
11	16	○ 3	F 2	12	15	○ 2
9	36	× 22	F 3	7	47	12
20	25	15	F 4	7	71	× 22
59	25	15	G 1	26	57	16
6	24	12	G 2	4	36	○ 7
46	21	○ 8	H 1	19	51	14
45	24	12	H 2	33	32	○ 4
558	25		計と平均	312	44	

平和条約に忠実でないとしてスパルタに腹を立て、スパルタにもアテナイに対する不信の念を抱きつづけていた者たちがいる所へ、元々平和条約を苦々しく思っていたアルキピアデスが、その状況を利用していろいろ己れのために画策する。まず42.1の終りから2にかけて僅か9行の間に(スパルタ人が) *νομίζοντες*、(アテナイ人が) *νομίζοντες*、そして *ἐνόμιζον* と同じ動詞が3度も現れるのに驚くと、§43ではアルキピアデスが皆の者から軽んじられていると誤って (*νομίζων*)、自分の名誉心のために (*φρονήματι φιλονικῶν*) スパルタとの平和条約を破棄してむしろアルゴスと結んだ方がいいと考えて (*ἔδοξε*) 画策し、それがまんまと成功する。その結果スパルタ人やアテナイではニキアスがだまされたことになり、無論アルゴスも動くわけで、この間に *οὐ μέντοι* (43.2)、*διενοεῖτο* (同)、*νομίζων* (43.3)、*νομίζοντες* (44.1)、*δοκούντες* (44.3)、*βουλόμενος* (同)、*δείσαντες* 等々と連なることになる。彼の僻みによる画策、その画策に振り廻される各方面の思わく、それを記すために動機語と主観語が多くなった。これも心理的な記述と言ってよいだろう。

③という種類は三種類の中では最も平凡で説明も不要に見えるが、一つ言っておいた方がよいことがあって、例えば H 2 などという箇所を見てみると、今 E 3 で見たのとはちょっと違う風景をここには見出す。先程も述べたように、E 3 をさらに仔細に見て行くと、主観語と動機語の分布にむらがあり、ある特定の箇所にそれが集まってあとの箇所にはそれほど多くない。それに対して H 2 では、のべつに同じような割合でこういう語が散在していて、OCT でなら 1 頁に 1—3 語ぐらいの割になる。これは実は H 1 でも似たようなものであって、VIII を通して動機語・主観語が比較的集まっているのは 45—52 のアルキピアデスその他の画策の条と §66 の寡頭派の実体を記している所ぐらいなものである。このために、VIII からどこか特定の箇所を切抜いてここに紹介することは甚だむずかしい。こうして、VIII 以外では、例えば E 3 のように動機語等が間歇的に多用されていたのが、VIII では、数は全体としてやや多めでも特に多いわけではないのに、大体平均した一様な割合で現れて来るということが言えそうで、これが一方では VIII には動機語・主観語が多いという印象の原因となり、一方では VIII は推敲を経ていない文章だということの一つの現れではないかという想像を誘う。⁽¹⁶⁾

そこで残りは①だが、これはいちいちの箇所に当らなければならない。A 1 については、その大半が「古代史」そして残りが方法論でということと説明がついた。そして他の箇所についても、「史」が主体ならば動機語が、「論」が主

体ならば主観語が多くなる、というのが、今まで見て来たことから当然予想される所である。¹⁷⁾ 果してそうなるかどうか。

A 2 は典型的な「史」の箇所である。ケルキュラとコリントスの確執、それに応ずるアテナイとスパルタ王アルキダモスの、行動をひたすら述べていて、多少これらの人物の思わくに立入ることはあっても深入りはしない。「史」だから動機語が多いのだと説明できそうな典型的な例。だが *ὁμως* までが使われていないことを見ると、それだけでは済まされない（上記18頁参照）。

A 4 は少し違う。ここは動機語が×で主観語が○。ここでは戦闘行動らしきものは126-7にほとんど限られていて、あとはスパルタのパウサニアスの挿話（128-133）とアテナイのテミストクレスの挿話（137-8）で、挿話のせいか動機語が少ない。主観語に一応○がついているが、数そのものは決して多くはない（上記17頁参照）。

B 1（動機語×、主観語○）。ここは開戦初年度の記述だが、それにしては戦闘行動が驚くほど少ない。2-5のみがテバイによるプラタイア攻めで、この箇所の動機語の大半はここに集中している。これ以後のほとんどはスパルタ人のアルキダモスに対する苛立ち（決断が遅すぎる、攻め方が手ぬるすぎるといふ）と、アテナイ人のペリクレスに対する鬱憤（なぜこっちから攻めて出ないでただじっとこらえているのかという）とが大方を占める。だから書かれているのは予想と思わくと憤満で、事実というよりは推察伝聞が主となり、それで主観語がふえる。18.5と20.1に見える *λέγεται* はこの箇所全体を象徴している。

B 2（動機語×、主観語○）。ここは有名なアテナイの疫病流行の記述が主で、それに、この疫病で死去したペリクレスの批評がつく。疫病の方は記述に徹していて、記録文学の絶品、勿論動機語・主観語共にほとんどない。ペリクレス評の方は「論」だから主観語が多いと言えば済みそうである。

B 3（動機語○、主観語×）。一転して戦闘と行動に満ち満ちた所で、だから動機語が多い、つまり「史」だから動機語が多い。

C 1（動機語○、主観語×）。3.1に *ἠγοῦντα, μέντοι, δείσας, ἐβαίλοντο* とつづくので、「思ったもののしかし恐れて欲した」とは一体何かと驚くが、これはレスボス島がアテナイに叛旗を翻した時のアテナイ人の反応である。所がここ以外については取立てて言うべきほどのことはなく、この箇所の様子は③に分類した箇所のそれに似た所がある。

D 2 と D 3 は共に動機語○・主観語×。スパルタの將軍ブラシダスの行動の跡を辿って動機語は満ちあふれるが、主観語は少ない。ツキジデス自身もこの

ブラシダスと対峙することになり、拳句に作戦の不手際を問われて祖国を追われる身となったことはみづから記しているが、その文中に主観語ゼロというのが印象に残る。⁽¹⁷⁾

E 2 はアテナイにもスパルタにも和平への気運が現れて来たことを述べる条。§14はアテナイの、§15はスパルタの、§16はそれぞれの要路にある個人の、和平を実現させようと行動するに至った動機を述べる。かくて動機語○、主観語×となる。

F 1 は、アテナイがシシリー遠征を民会で決議するに至ったいきさつと、それを噂として聞いたシシリー側の反応を紹介する。30—2の遠征隊出発の描写のような見事な文章もあるが、いきさつも反応も共に演説によって大方は説明されているというのは、実はツキジデスではここぐらいなもので、註(5)で「演説は我々の考察にとってはほとんど無関係」という言い方をしたのは、少くともこの箇所は間違いなく例外になるからである。動機語が少いのも演説のせいである。

先程覚えておくべきこと(二)として、ある箇所が「論」じているからと言って必ずしも主観を表し得る語が多く使われているわけではないと言ったが、「史」ならば動機語が、「論」ならば主観語が多用されるというのはやはり健全な常識のようである。ただしツキジデスがどういう態度で論じようとするかによって「必ずしも…」という事態が生じるのである。

①に属する箇所を検討した結果知り得た一番重要なことは、ほとんどの場合(C 1のような例外を別として)それぞれの箇所でなぜある種の語が多いか、あるいは少ないかという説明が比較的容易にできるということで、これらの箇所ではそれだけ文章が整頓されている、ツキジデスの考え方が決まっているということの表れだと見ることができようとは私は思っている。

8

そこでまたはじめの間に帰る。ツキジデスははじめ主観を表す語に満ちた文章を書いていたのを、推敲の段階で次第に減らして行ったか。これに対する答はすでに十分出ていると思う。それははじめの草稿にも多かつたろうが完成した文の中にもまた多かつた。ただし同じく多いと言っても、完成された箇所では整頓されて多いが、草稿では無秩序に多い。ただ多さだけを問題にするならば、平均すれば完成された文の方が僅かながらむしろ多いぐらいであって、

ツキジデスが歴史叙述の中に自分の主観を表していると思取られるかも知れない語の使用を差控えた形跡はない。

ただし、登場人物の動機を表す語と彼自身の主観を表し得る語は区別すべきで、前者は全巻を通じて想像以上に多く(上記8頁、覚えておくべきこと(ハ))、これが少ない箇所はむしろ例外と見てよいのに対して、後者はそれほどには多くない、多い箇所の方が例外である。I 23から24に移るや、それまで多用されていた主観語が一斉に激減する(あるいはゼロになる)のは、I 2—20が古代史で21—3が方法論だというのが主な理由だろうが、それだけでなく、I 24以下を書くに当たってツキジデスが、さてここからは事実の記述だと、なるべく主観語をまじえまいとかなり気負ったせいではないかと思われてならない。*μέντοι* や *ὅμως* までもが消えてしまうのはこのためではないか。

ここまで来るといわゆる Composition Problem に片足入れたことになり、その Composition Problem は、問題の性質と文献の現状から見て、すっきりと証明することは不可能と見られるが、⁽¹⁸⁾ 蓋然性を指示する材料ならば集められるわけで、その材料が多くなればなるほど蓋然性が高められることは言うまでもない。そして我々が上来見て来たことから四つの点がそういう材料として利用できる。(1)動機語・主観語の分布の仕方がVIIIでだけ他の巻と様相を異にしている(上記19頁)、(2)*μέντοι* と *ὅμως* がVIII(この件に関してはVも)で異常に多用されている(註14参照)、(3)-sis 名詞の用例がVIIIで異常に少ない(註5参照)。そして(4)としてもう一つ挙げられるのは、動機を表す動詞のうち *αἰεσθαι* と *βούλεσθαι* の用法が他の巻と著しく異なる——分詞としてより定動詞としての用例の方が異常に多いということ——である。これら4点はいずれもVIIIが推敲を経ていないことを指示している。

Composition Problem の大筋に関しては、I—IVは完成原稿、V以下はVI、VIIのシシリー戦記は他から独立していて完成原稿、Vには推敲の手は入っているが未完了、VIIIは草稿すら途中までで、推敲にまでは手が及んでいない、というのがやはり最も素直な考え方だと私は思っている。⁽¹⁹⁾

註

- (1) *HCl*, Vol. V, 361f, Andrewes はここで「言語というのはうっかり頼ると危い案内」だと言っているが、こう言う時彼が考えているのは主としてギリシア語の慣用表現のことで、然るにツキジデスは他では見られない独特の言い廻しをするから、ということなので、我々は安心してツキジデスの言語の調査を始めることにする。

- (2) 1835年8月25日付、エリス宛書簡。
- (3) *HCT*, Vol. V, 399.
- (4) *HCT*, Vol. V, 369ff. 373f.
- (5) 各巻ごとのツキジデスの動名詞としての *-sis* の用例は I : 30, II : 27, III : 33, IV : 37, V : 23, VI : 17, VII : 25, VIII : 12 であり、演説中の用例を除けば、I : 19, II : 15, III : 24, IV : 24, V : 17, VI : 13, VII : 21, VIII : 12 で、これの頻度は I : 93 (行につき 1、以下同様)、II : 112, III : 62, IV : 92, V : 89, VI : 110, VII : 82, VIII : 188 となり、VIII には他の巻の半分と少々しか動名詞としての *-sis* が含まれていないことが分る。
- (6) 1 人称というだけなら他にもある。しかし評価という主観を含んでいるのはこの語だけなので、入れることにした。
- (7) こういう分け方をするについては、やはり *HCT* の前掲の Dover 先生の 'Appendix 2' で行われている区分 (cf. 389) と Luschnat in *RE*, Suppl. 12, 1117 の表がヒントになった。
- (8) 区切り方にもよるのであって、例えば H1 の頻度は 16.4 だが、H1 の中の VIII 45—54 だけを見れば 12.0 となる。
- (9) 下記 16 頁以下で述べる *μέντοι* や *ὅμως* は時代の古きなどには関係がないにもかかわらず、A 1 では 8 例、A 2 では 0 という極端な対照を示している。
- (10) この箇所全体については *HCT*, Vol. IV, 317ff. (Dover) を参照。
- (11) *HCT*, Vol. IV, 317.
- (12) 上の註(9)で挙げた *μέντοι*、*ὅμως* の他に、本稿の「表」には採録しないがまずツキジデスの主観を表しているだろうと思える語や句や文のメモを私は持っているが、そのメモに控えられた項目数でも A 1 は 16、A 2 は 0 という際立った対照をなしている。これも *μέντοι*、*ὅμως* とともに「考古学」「論」以外の理由というのを考えないわけには行かないだろう。
- (12a) この *μέντοι* について Denniston は勿論実に多くのことを教えてくれるが、我々の当面の問題にとって最も大事なことは *The Greek Particles* (2nd ed. Oxford 1954)、405 の指摘——通常 *μέντοι* は *ἀλλά* や *μὲν οὖν* とは違って、'balancing adversative' だということ、つまり adversative' である限りでは先行する文に意味上対立するわけだが、しかしその先行文を打消してしまうことなく、それはそれとして認めておいて「しかし」とつなげる——である。このために *μέντοι* (および *ὅμως*) は次節のはじめで述べるような効果を持ち、それゆえ主観に関わることになるのである。なおこの *μέντοι* とまた似ている *καίτοι* という小辞について Denniston, op. cit., 556 は、たいていはある種の 'combative tone' を持っていて、だからツキジデスでは *καίτοι* は I 10.2 を除けばあとの 23 例はみな演説の中で使われている、と言っているが、果してツキジデスの 23 例はすべて喧嘩ごしの演説の中で使われているかどうか。少くとも I 10.2 ではそうではない。
- (13) この文章については Classen-Steup, *Tcukydidēs*, *Vierter Band* の註を参照。
- (14) 念のため、A 1 でもっと *ὅμως* を使えるかどうか見ても、まずその余地はない。強いて補うとすれば 5.2 : *ὡς οὐτε ὦν πυνθάνονται ἀπαξιούτων τὸ ἔργον* というのも書改める他ない。また、「それにもかかわず」というのは多くの場合己れの推理力を越えていることの表白にもなるということを含頭において、各巻別の *ὅμως*、*μέντοι* 等の分布を見ると、I : 19, II : 14, III : 12, IV : 10, V : 20, VI : 9, VII :

- 10、Ⅷ：27となっており、これを～行につき1例という頻度数で表すと、Ⅰ：93、Ⅱ：20、Ⅲ：117、Ⅳ：223、Ⅴ：81、Ⅵ：157、Ⅶ：163、Ⅷ：75となって、(Ⅰを例とすれば)ⅤとⅧに断然多く、Ⅳに断然少ないことが分る。つまり不合理、不可思議の表白がⅤとⅧに抜群に多いことになって、これははじめに紹介した Andrewes の、Ⅴのかなりの部分とⅧ全体は推敲の手が及んでいないという指摘と見事に符合する。
- (15) 極端な例はG2で、ここには元Ⅷ2.3の *εἰκόσ* 1個しかなかったから頻度145で全巻中最低に近かったのが、Ⅷ1.3 *ὄμως*、6.3 *μέντοι*、6.4 *ὄμως* と加わったために用例数4、頻度36となって一挙に上から7番目に跳ね上った。
- (16) この他一般に③に属する箇所は、程度の差こそあれこの傾向を示す。ただしG1という大変な例外がある。全巻中の圧巻と言ってもよいこの箇所は、主観を表し得る語は多くもなければ少くもない。分布の仕方も一様でむらがない。しかも注目に価するのは、あっても不思議ではない仮定文がここには一例もないということである。(「表2」でⅠとなっているのは、69.2のニキアスの悲痛でもあり滑稽でもある最後の励ましの言葉を描写するツキジデスの言葉に含まれている potential optative *εἰποῖεν ἄν* を入れたためであって、本来の仮定文ではない)。
- (17) 当面の箇所に演説があるかないか、あるとすればどういう演説かが、そこの動機語や主観語の多寡ということ関係がありそうだが、実は余りない。動機語が示しているのは登場人物の、今、ここでこの行動の動機だが、演説が語る動機はもっと大きな基本的なものだからで、両者には少なくとも直接のつながりはない。私が知る限りで唯一の例外と見られるのは、Ⅶのニキアスとアルキピアデスが、シシリー遠征を思い止まらせよう、一方はそれを焚きつけようとしての演説である。
- (18) すでにこれ自身歴史を持つに至ったこの問題については、ツキジデス全般を扱うほどの書物ならば必ず言及しているが、最近の代表的な議論は O. Luschkat in *RE*, Suppl. 12 (Stuttgart 1971), 1112-32, 1183-1229; K. von Fritz, *Die griechische Geschichtsschreibung*, I (Berlin 1967) 542-64、それと上来しばしば引用した *HCT*, Vol. V の Andrewes, Dover 両氏による Appendices (pp. 359-444) であろう。
- (19) ツキジデスの動機を表す動詞の全体を平均すれば、約60%は分詞であり、残り40%が定動詞である。勿論個々の動詞がみなこの比率で使われているわけではなく、Ⅷ以外の巻の使い方を見ると *διανοεῖσθαι* では7:3の比で定動詞が多く、*βούλεσθαι* はほぼ同じ比率で分詞が多い。所がⅧの *διανοεῖσθαι* は7:3どころの比ではなく、定動詞12、分詞1の用例が見出され、また *βούλεσθαι* は定動詞14、分詞16で、共に他の巻に比べて定動詞が甚だしく多い。そしてこれらのことは次のことを示唆する。すなわち、ツキジデスは登場人物の動機を書く時(個々の動詞にちがいはあるにせよ平均すれば)分詞構文で書くことが多かった、推敲された彼の文ではそうなる傾向が強かったのに対して、Ⅷでは定動詞として使う傾向がはっきり見られる。